

# 樽前山

## 1 概況

A 火口及びドーム南西噴気孔群(B 噴気孔群)では、活発な熱活動が続いています。

地震活動は比較的落ち着いた状態で推移しました。B 噴気孔群を始め全般的に噴煙量はやや多く、A 火口及び B 噴気孔群の火口温度は極めて高温の状態を維持しています。

## 2 地震活動の状況

地震回数は 1 日あたり 0~20 回と平常時の範囲内で推移し、顕著な地震の増加はありませんでした。震源は山頂火口原の浅部(海拔前後)で、これらは通常の活動域であり特段の変化は見られていません。火山性微動は観測されませんでした。

月別地震・微動回数(C 点)

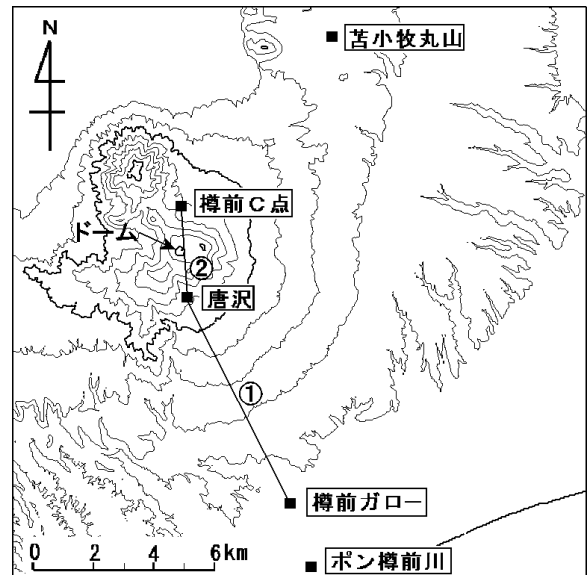
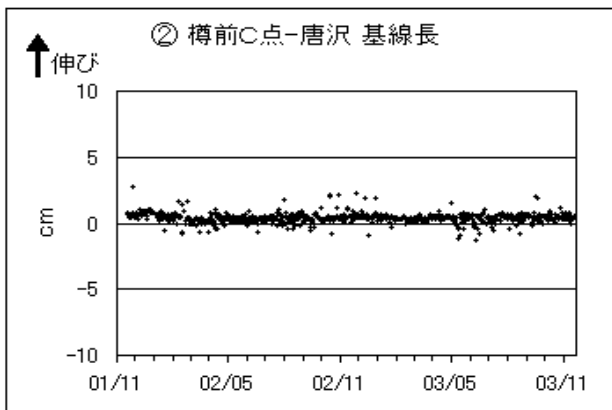
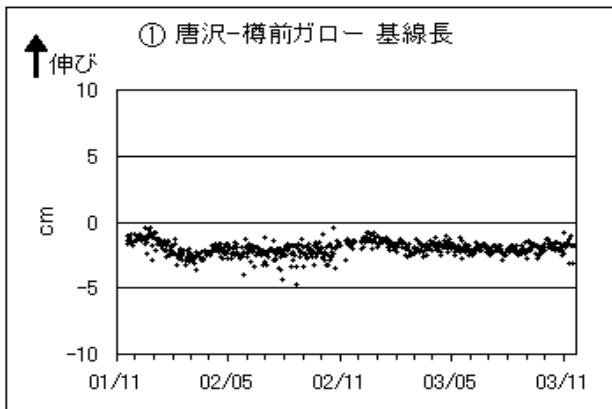
2002~2003年	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
地震回数	64	35	64	51	90	60	38	66	54	73	113	151
微動回数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

## 3 噴煙活動の状況

遠望カメラによる観測では、A 火口、B 噴気孔群及び E 火口で噴煙量のやや多い状態が先月以降続いています。なお、先月に時折観測された B 噴気孔群が夜間に高感度カメラで明るく見える現象は、10 月 19 日以降観測されていません。

## 4 地殻変動の状況

G P S 観測で見られる基線長の変化は主に季節変動が原因と推定され、火山活動に起因すると考えられる変化はありません。



樽前山基線長変化

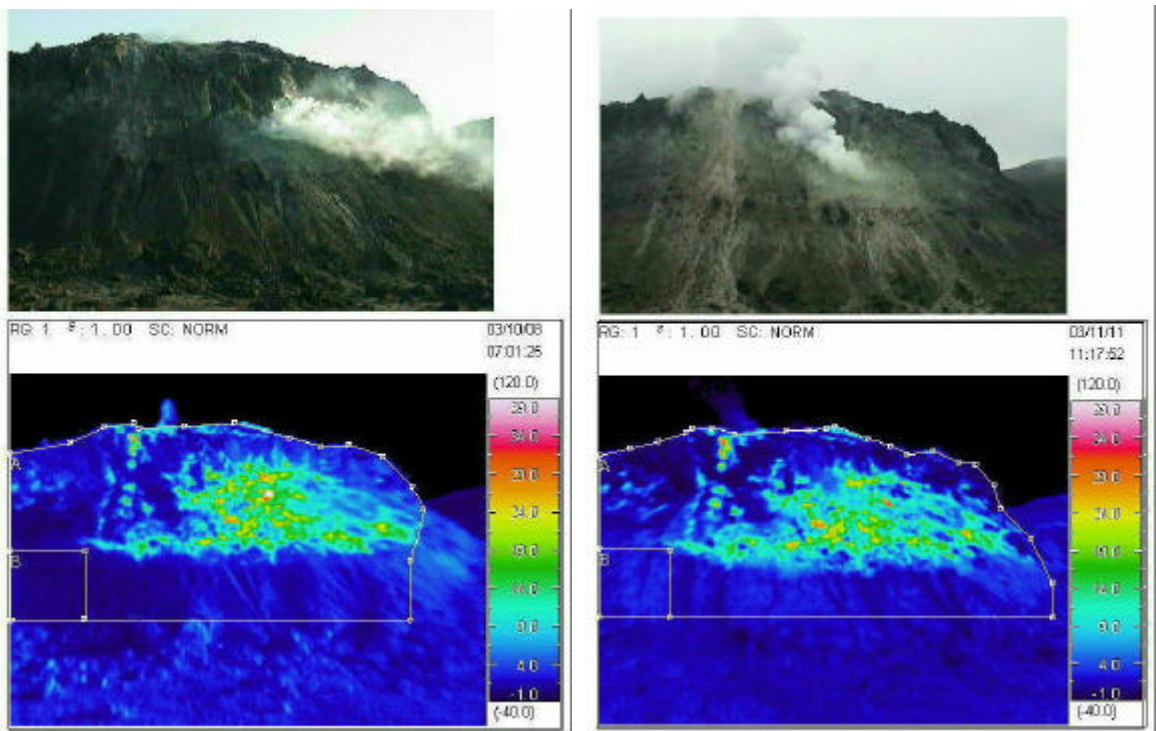
(2001年11月14日~2003年11月30日)

5 調査観測の結果

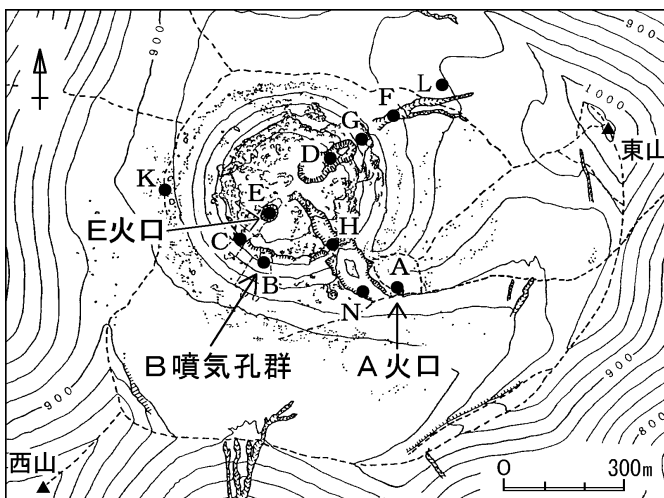
火口温度は極めて高い状態を維持しており、熱的な活動は引き続き活発な状態です。

11月11日に行った調査観測では赤外放射温度計\*によるA火口の温度は約640(前回10月7~8日:約650)と極めて温度の高い状態が継続し、噴煙には強い二酸化硫黄臭が認められました。

また、同日に産業技術総合研究所が行った観測によると、ドーム南西噴気孔群(B噴気孔群)の温度は約480(前回10月7~8日の札幌管区気象台の観測時:約500)で前回に引き続き極めて温度の高い状態が続いています。赤外熱映像装置\*による観測では熱異常域の拡大や新たな高温部は認められず大きな変化はありません。



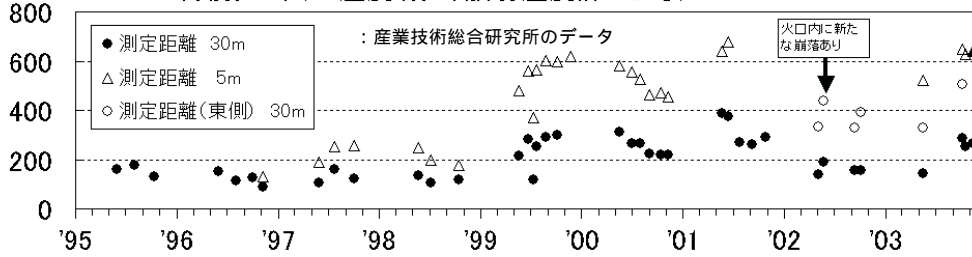
B噴気孔群の表面温度分布(左:2003年10月 右:2003年11月 測定距離:約500m)  
熱異常域(水色部分)の拡大や高温部の分布には大きな変化は認められません



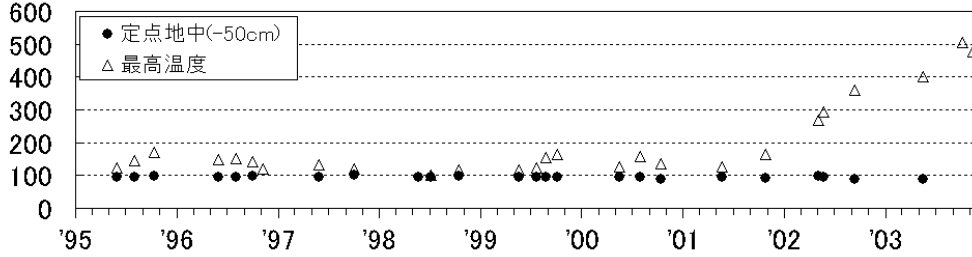
樽前山山頂ドーム周辺図  
(A~N:調査観測ポイント)

\* 赤外放射温度計や赤外熱映像装置は、物体が放射する赤外線を感じて温度を測定する計器です。熱源から離れた場所から測定できますが、噴煙や霧で対象が見えにくい場合や、熱源から遠く離れるほど実際よりも温度が低く表示されます。

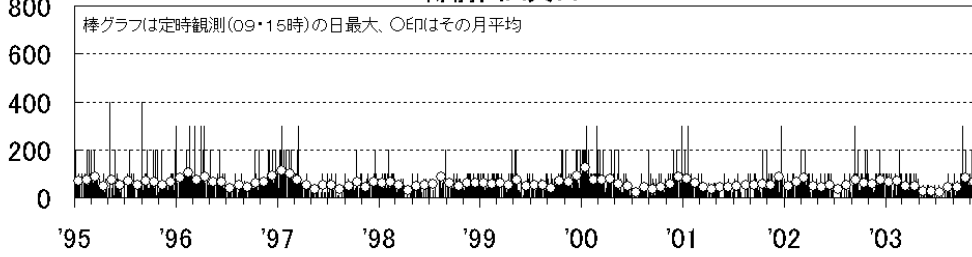
温度(°C) 樽前山A火口温度(赤外放射温度計による)



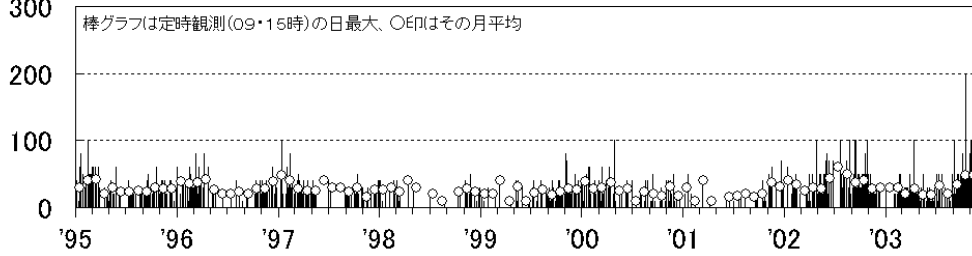
温度(°C) 樽前山B噴気孔群温度



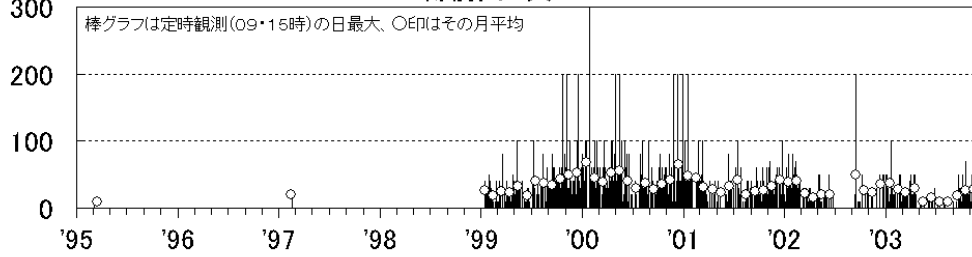
噴煙高度(m) 樽前山A火口



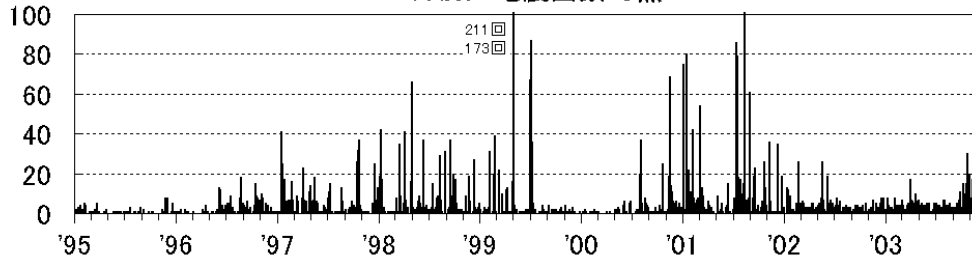
噴煙高度(m) 樽前山B噴気孔群



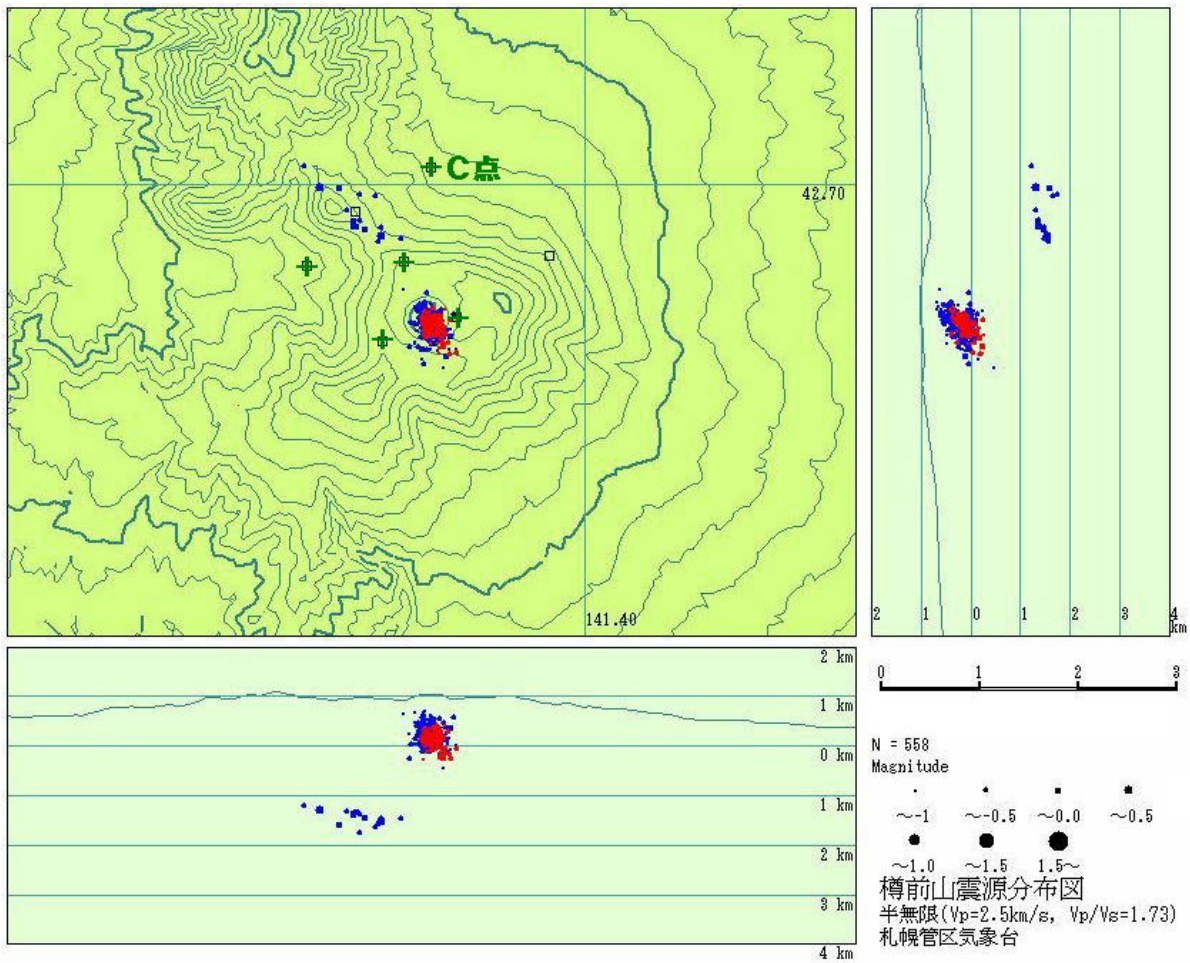
噴煙高度(m) 樽前山E火口



回数 樽前山地震回数 C点



樽前山火山活動経過図(日別、1995年1月1日~2003年11月30日)



樽前山震源分布図

+ 印は地震観測点

震源表示 赤：2003年11月1日～11月30日(今期間)

青：2002年11月6日～2003年10月31日(前期間までの約1年間)

過去の震源はほとんどがドーム直下の浅部(海拔付近)に集中しており、今期間の活動もこの領域内で発生しています。ドームの北西約1.5km付近に見られる震源は十勝沖地震後の9月28～29日に一時的に発生した地震です。